

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：27104

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00256

研究課題名（和文）19世紀の演奏文化における前奏演奏

研究課題名（英文）An investigation into the nature of prelude as a feature of nineteenth-century performance practice

研究代表者

鷲野 彰子（Washino, Akiko）

福岡県立大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：20625305

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題の目的は、文献情報のみでは捉えきることができなかった19世紀の演奏会等の場における即興の前奏演奏の役割や用いられ方について、録音資料を用いて解明することにある。

即興の前奏演奏が含まれる音源を収集・分析し、それらと19世紀の教則本の記載とをどのように関連づけることができるのかを検討した。さらに、楽曲の序奏等の冒頭部分と即興の前奏演奏の実践例（音源）との類似性について検討した。その結果、全部で63点の前奏演奏の実践例を見つけることができた。特にヨゼフ・ホフマンとヴィルヘルム・バックハウスの実践例を多く見つけることができたため、彼らの実践例を中心に分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、これまでスポットライトをほとんど浴びてこなかった、演奏する際の即興的前奏演奏の実践例（録音）に焦点をあてて詳細に調査したことにある。「消え物」であり「前座」的存在とみなされていた即興的前奏演奏であるが（しかも20世紀前半にはその演奏慣習自体もほとんど消滅してしまった）、録音された実践例を用いて文献情報のみからは捉えきれないその実態の解明に迫った。

本研究の社会的意義は、HIP（歴史的知識に基づく演奏）に興味が集まる昨今において、これまで手掛かりに欠けた前奏演奏の実践例を体系的に把握できるようにした点、そして記譜された楽譜の解釈に再考のヒントを与えた点にある。

研究成果の概要（英文）：The objective of this research project is to elucidate the nature of improvisational prelude performances in the 19th century, which cannot be fully understood through existing literature alone, by utilizing recorded materials from concerts and other settings. The study involved collecting and analyzing audio sources containing improvisational preludes, and examining how they relate to descriptions in 19th-century instructional texts. Furthermore, the research explored similarities between the introductory sections of musical compositions (such as preludes) and examples of improvised prelude performances (audio recordings).

As a result, a total of 63 instances of prelude performances were identified. Particularly abundant were examples from Josef Hofmann and Wilhelm Backhaus, which were central to the analysis.

研究分野：音楽学

キーワード：前奏演奏 即興演奏 録音 19世紀の演奏法 序奏 記譜 ヨゼフ・ホフマン ヴィルヘルム・バックハウス

## 1. 研究開始当初の背景

演奏者自作の前奏演奏が付加されるような演奏会は、現在では完全に姿を消し、もはや文献中の情報になって久しい。楽曲を演奏する前に何某かの前奏演奏を弾いてから演奏を開始する慣習の存在や練習方法は、19世紀以前の多くの教本・教則本等の文献に記載されており、そうした慣習があったこと自体はよく知られている。現代においてそのような演奏は全く見かけなくなったが、20世紀前半の段階ではまだ聴衆はそうした演奏に出くわすチャンスがあった。

例えば、ヨゼフ・ホフマンの1937年11月28日のメトロポリタン歌劇場におけるゴールドデン・ジュビリー・コンサートの録音には、多くの前奏演奏が含まれており、一夜の演奏会で披露された曲目の多くに短い前奏演奏が付けられていたことがわかる。このような前奏演奏の含まれる例はホフマンの演奏に限られたことではなく、ヴィルヘルム・バックハウスやウラディミール・ホロヴィッツの録音にも含まれる。前奏演奏(曲と曲の間に挿まれているものも含めて、ここでは前奏とよぶこととする)は、たった1つの和音のみ、あるいは2つの和音のみで構成されるものもあれば、4小節程度の比較的長いものもある。また、場合によっては出版された《前奏曲》を用いて演奏されることもある(例えば、フェルッチョ・ブゾーニはショパンの《前奏曲》Op.28-7を弾き、その後2小節ほどのつなぎを加えて、《練習曲》Op.10-5を切れ目なく開始した録音を遺している)。

だが、それらの録音演奏を聴く限り、前奏演奏は19世紀の教本や教則本に書かれているような、演奏者の演奏前の手慣らしのためのものであるとか、次の作品の調性を準備するためのものである、といった理由のみでは説明がつかないものが多い。その一方で、演奏者自身が自由に行ったために彼らがそうしたルールを逸脱しただけだ、と理解するには、前奏演奏に関して書かれた19世紀の教則本の内容と符合する部分も多く、そのように理解するのもまた難しい。さらに、個々の演奏家によって前奏演奏の傾向は非常に異なる。そのため、教則本の例と実際の演奏の録音をどう結びつけて捉えることができるのかを丁寧に整理する必要があると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀における前奏演奏を、録音資料を用いて分析することで、これまで文献情報のみでは捉えきることができなかった演奏会等の場における即興の前奏演奏の実態を明らかにすることにある。さらに、出版された(つまり記譜された)楽曲冒頭部分と録音に記録された即興の前奏演奏とを比較対照させることで、楽曲冒頭部分の解釈や演奏方法について再考することにある。

そもそもこれらの前奏演奏がどの音源に含まれているかという情報がまとめられた資料がないことから、本研究では即興の前奏演奏が含まれる音源資料を集約することで、本研究のような19世紀から20世紀に行われた演奏活動の実態を調査するための基礎資料となると考えた。さらに、それらを分析することで、19世紀の演奏慣習として行われていた即興の前奏演奏の役割、そして即興演奏と続く楽曲の関係性等を明らかにしたいと考えた。

## 3. 研究の方法

はじめに、即興の前奏演奏が含まれる音源を収集し、どれほどの音源が存在するのか、どのような場合に前奏演奏が演奏されるのかを調査した。その後、音源に含まれる前奏演奏を分析し、それらが19世紀の教則本に示された説明や譜例とどのように結びつけることができるのかを検討した。さらにそれらの結果を踏まえて、楽曲の序奏等の冒頭部分と即興の前奏演奏の実践例(音源)との類似性について検討した。

## 4. 研究成果

本研究で得られた成果は、前奏演奏の実践例の音源の集約、実践例から前奏演奏の傾向を把握できたこと、それらの分析結果を踏まえて楽譜の記譜の解釈に新しい視点を提示することができたこと(「記譜された前奏演奏」の拾い出し)に大別することができる。

このうち最も困難を極めたのが、資料の収集であった。それというのも、本研究の対象である即興の前奏演奏部分は「記録の外」に置かれる傾向にあり、スタジオ録音で収録されるケースは非常に稀であったためである。その多くはライブ演奏におけるものであり、しかもライブ録音で前奏演奏が実際に演奏された場合にも、市販される録音では前奏演奏部分がカットされることも少なくなかった。本研究期間終了時点までに収集できた前奏演奏の実践例は、63点あった。ホフマンによる演奏が29点と最も多く、ついでバックハウスの17点、それ以外はホロヴィッツやブゾーニ、モーリツ・ローゼンタール、ディヌ・リパッティ他の演奏者らによる演奏がそれぞれ1点から数点遺されている。

の実践例の分析については、実践例が多く遺されたホフマンとバックハウスについて、録音

から楽譜に書き起こして、前奏演奏の傾向について分析した。ホフマンの場合、複数の演奏会のライブの音源が遺されているが、一夜の演奏会のプログラムのほとんどの楽曲の前に彼は何らかの非常に短い前奏演奏を挿入している。後続曲の準備の役割をしているものがそのうちの一定量を占める一方で、前曲との関連性があるものも一部含まれる。また、連続する2曲に付けられた前奏演奏自体を関連させた例もあった。

彼が前奏演奏を付けたか否かは、楽曲によって固定されていたわけでもないようだ。例えば、ショパン《ワルツ》Op. 64-1 や《ノクターン》Op. 15-2 が演奏される際には前奏演奏を伴う場合も、あるいは伴わない場合もある。また、同一曲に複数の異なる前奏演奏実践例が存在するものもあり、そのヴァリエーションは多彩である。

彼の前奏演奏の多くが、最後まで調性のはっきりとしないモジュレーションか、あるいは後続曲の主和音のみ(または属七和音のみ)であり、完全終止するカデンツを伴うケースはほとんどない。なかでも主和音のみを提示するケースが多く、後続曲の調性を示唆的に示す傾向がある。ときに後続曲と何の脈絡もない前奏演奏が弾かれたりもする。彼の前奏演奏は後続曲の調性や雰囲気聴衆と共有する、という限定的な役割にとどまらず、演奏会全体の「雰囲気」を变幻自在に操る装置として働いたと考えられる。その一方で、チェルニーが「最も短い前奏」とよんだ属和音と主和音の組み合わせをそのまま実践した演奏もあり、当時の教則本の記載内容を音へと具現化した例としても、前奏演奏の慣習が失われた現代の私たちにとっては非常に貴重な記録といえる。

バックハウスの場合、前奏演奏が含まれる録音は、ほとんどが彼の晩年に録られたものであり、ホフマンの場合と同じく、ライブの演奏会がラジオ放送やレコードに収まった形で遺されたものである。ホフマンが演奏会の曲目の多くに前奏演奏を付したのに対し、バックハウスの場合、アンコール曲に前奏演奏を付ける傾向が見られる。各アンコール曲を演奏する際に挿入された彼の前奏演奏は、アンコール曲と次に演奏されるアンコール曲を緩やかに結びつける性格を伴う。彼の場合、前奏演奏の最終部分は属和音上にとどまる。つまり、前奏演奏をその後に演奏する曲の「呼び水」として使用し、そのまま自然な流れで後続曲へと入っていくパターンが多い。

彼の前奏演奏は、ホフマンの場合と比較するとより長く、美しい抒情的な旋律を伴うものが少なくない。後続曲のモチーフ(旋律音の進行やリズム、跳躍など)を示唆的に示すものが彼の前奏実践例の1/3程度を占める。一部、後続曲ではなく、前曲と関連する前奏演奏もあるが、それらは前曲の旋律を借用した形で展開されるなど、より明確な関連性が見られる。

前奏演奏の実践例と同様の例を楽曲の冒頭から探し出す「記譜された前奏演奏」の拾い出しについては、ベートーヴェン《ソナタ》Op. 31-3 や《ソナタ》Op. 78、メンデルスゾーン《無言歌集》の複数の曲、シューマン《夜曲》Op. 23-4、そして多くのショパン作品の冒頭部分その他の多くの箇所録音に遺された前奏演奏実践例と類似する例を見つけることができた。この「記譜された前奏演奏」の存在は、音源として遺されている前奏演奏の実践例の記録の数が限られているだけに非常に重要である。なぜなら、それらの「記譜された前奏演奏」は、実践例の録音の変化形として扱える可能性を秘めているからである。「記譜された前奏演奏」という視点は、その記譜部分がどのように解釈され、演奏されたかを前奏演奏の実践例の録音から類推することができる、という意味で重要であるが、翻って、即興の前奏演奏がどのように演奏されたかを理解する上で、数少ない録音による実践例をカバーして補填・補強するに十分値する資料となり得る。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鷺野彰子	4. 巻 19
2. 論文標題 ヨゼフ・ホフマン (1876-1957) の即興的前奏演奏	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 阪大音楽学報	6. 最初と最後の頁 47-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷺野彰子	4. 巻 21
2. 論文標題 ヴィルヘルム・バックハウス(Wilhelm Backhaus)の即興的前奏演奏	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 音楽表現学	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鷺野彰子
2. 発表標題 楽譜に記譜された即興的前奏演奏
3. 学会等名 日本音楽学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鷺野彰子
2. 発表標題 20世紀前半の即興の前奏演奏実践例とそれを取り巻く要因の関係性
3. 学会等名 日本音楽表現学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鷲野彰子
2. 発表標題 20世紀前半の演奏会における即興の前奏演奏実践例の分析
3. 学会等名 日本音楽学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鷲野彰子
2. 発表標題 前奏を演奏する文化：初期録音に残された「前奏」演奏
3. 学会等名 日本音楽表現学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関